

主題	個別ケアの必要性和効果をアピールしセンター方式を定着させた
副題	～本人本位のケアへの挑戦。センター方式定着への道～

認知症ケア	意識改革
-------	------

研究期間	36ヶ月	事業所	富士見台特別養護老人ホーム
------	------	-----	---------------

発表者：古澤 千恵（ふるさわ ちえ）	アドバイザー：
--------------------	---------

共同研究者：認知症ケア推進委員会

電 話	03-5241-6010	メール	fujimi-tokuyoh@nerima-swf.jp
FAX	03-5241-1760	URL	

今回発表の事業所やサービスの紹介	緑の多い閑静な住宅街に位置する56床の従来型多床室の施設です。施設内には地域包括支援センター支所、居宅介護支援事業、通所介護事業を併設しています。近隣は練馬区内一番の高齢化地域です。施設は、認知症になっても安心して暮らせる地域の核になれるよう、施設内事業が連携、協働しての運営に取り組んでいます。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

特別養護老人ホームの新しいアセスメントツールとして『認知症の人のためのケアマネジメント センター方式』を導入し、特定の利用者に必要シートを選択し記入していたが、情報が少なく、本人を理解しケアにつなげるまでには至らなかった。

そのため認知症ケア推進委員会が主体となり、センター方式の必要性を職員に勉強会などで伝えた。しかし、大半の職員は新しいことや、新しい取り組みに対して負担感が先行し否定的で定着しなかった。また、委員会だけの勉強会では内容の理解は出来てもアセスメントツールとして、記入・ケアプランへ立案できる情報の整理などが出来なかった。さらに、変則勤務の事業の中では、趣旨の共有や意識の統一が出来ていなかった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

目標

- 1、センター方式の定着
- 2、本人本位のケアの充実

期待する成果・目的

センター方式を理解し、職員それぞれが利用者に適したアセスメントシートが選択でき、活用できるようになる事を期待し段階的に目標立てをした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

定着させるための、取り組みとして

- ・介護職員に認知症の理解を（病態を含めた）勉強会、事例検討会を定期的を実施
- ・ケアプラン立案前のアセスメントツールとしてセンター方式を使用
- ・職員会議（毎月）内において、職員同士のロールプレイ（疑似体験）実施
- ・施設内のケース記録記入方法の工夫
- ・特養職員全員（他職種含）での勉強会実施
- ・役職者の中での共通認識

《4. 取り組みの結果と考察》

取り組みを繰り返し行った結果、職員間での理解が深まり、新しい事への負担感や否定的な意見が減り、センター方式の定着につながった。

取り組んだ内容は職員からの意見を参考に毎年リニューアルする事で職員の新しい取り組みへの導入意識を常に持つことが出来る。取り組み意識として、通常業務+ α ではなく、業務の中に組み込む為には、その時その時に業務全体の見直しを行なう必要性があった。

《5. まとめ、結論》

同じ意識を持って繰り返し取り組むことの重要性や必要性をアピールし成果を共有することで定着することが出来、個別ケアに反映した。今後も繰り返し取り組みを継続する事でさらに意識改革を進めていく。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、介護職員に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

永田久美子『認知症ケアをもっと“楽”に！』
平成22年3月1日第3刷発行

認知症介護研究・研修東京センター
『認知症の人のためのケアマネジメント
センター方式の使い方・活かし方』
平成23年12月1日第2刷発行

《8. 提案と発信》

チームケアにおいてセンター方式を活用出来る事は利用者の本人本位のケア充実にとっても直結していると考えられる。活用することで職員も『個』を観察する意識が強くなり、より寄り添うケアのヒントを見つけやすくなる。しかし、活用するには職員に長い期間繰り返し伝えていく根気強さと明確な道しるべが必要である。道しるべは組織的に作っていく事が重要となる。

【メモ欄】